

小学校外国語活動を中学校外国語学習に生かすために

五城目第一中学校 ポニーヤ 慶子

1 はじめに

「9才の壁」という言葉を何度となく耳にする。英語習得開始期が早期であればあるほど、日本語と英語両方を話す能力が自然に身につく。9才までは「言語習得適齢期」、「異文化順応適齢期」(Piaget)と主張されている。実際に自分自身も小学校で外国語活動に参加し中学年に感じる境界線である。6才から15才までの子ども達を見つめながら、以下の三点について、「無理のない」言語習得の手立てを模索する。

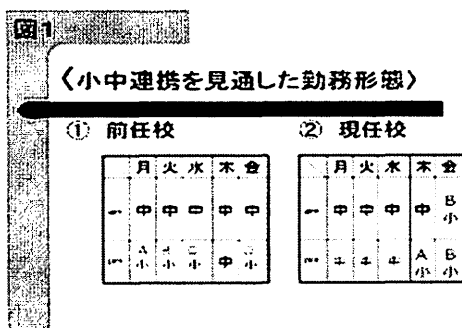
- ・ 9才までの柔らかい能力を生かした活動と方法。
- ・ 音声で親しめる活動が及ぼす言語習得の効果。
- ・ 異文化順応能力を自然に身につけるためのALTとの連携。

2 これまでに小中を行き来してみえた成果と課題

①学級担任の興味関心が児童の興味関心

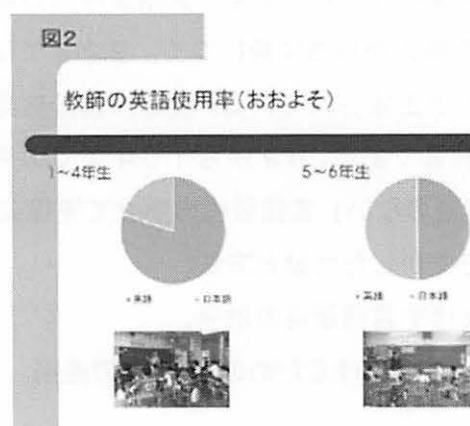
平成21年度より、中学校の外国語科と小学校の外国語活動を指導する教員として小・中学校を兼務している。(「図1 小中連携を見通した勤務形態」参照)

週一度の外国語活動において、中学校の教師が専門的に英語指導を行ったところで興味関心が高まるかというそうではない。学校生活を毎日共にする学級担任が、慣れない英語でALTや英語教員とコミュニケーションを図ろうとする姿勢を見せたり、共に外国文化について学ぼうとする姿勢を見せたりすることが児童の興味関心に多大な影響を与えている。活動を楽しむ教師の下で外国語活動を行ってきた児童を中一で担当した際には、コミュニケーション能力、語彙能力共に高い能力を備え合わせていた。子ども達にとって学級担任の導きはその後の学習態度に大きく反映される。



② クラスルームイングリッシュの小中連携

小学校外国語活動でクラスルームイングリッシュに慣れている児童は英語で行われる中学校の授業に抵抗がない。反対に日本語のみで活動を行ってきた生徒は馴染みが必要となる。入学時前に小中教師間の連携が行われなければならない。小学校低学年については ALT がほとんど英語のみで活動を行っている。（「図2 教師の英語使用率（おおよそ）」参照）



③ 「低学年は耳コピーの名人」、「中学年は違いを発見し、楽しむ名人」。「高学年は知恵や知識を得ようとする名人。」

低学年は真似っこ能力が卓越している。ALT が言う言葉をそっくり発音できる。R と L の発音など見事なものである。しかし学年が進むにつれ違和感を覚え真似ができなくなり、カタカナに直しながら発音をする傾向がある。中学年は音の違いを見つけ、類似音の単語を探し楽しむ傾向がある。「Orange」→「俺んち」など。いわゆる「9才の壁」のステージである。違いを見つけて楽しむ中学年だからこそ、外国語活動をスタートさせるには適齢期だと推測する。高学年においては知識を伴う活動を行う必要がある。この時期にアルファベットを書いたり、単純な文法を解説し、英会話を楽しむことは無理ではない。日本語と英語の語順の違いに気づくために板書を利用する学級担任もいる。学級担任はクラスの実態に合わせ無理のない指導ができるので児童は英語嫌いになるどころか興味津々で違いに気づこうとする。

④ 小学校の学級担任の変容

小学校外国語活動が一斉に導入された平成23年度、小学校の学級担任は「英語が専門ではないのにどのように英語を指導すればよいか」と頭を悩ませていた。しかし、平成27年度現在では英語を交えながら ALT と連携して指導する小学校教員の姿が多く見

られる。その中には活動をオールイングリッシュで実践する教員もいる。児童一人一人の興味を引きつけながら ALT を上手に活用する姿は中学校教員も学ぶところが多い。しかし、昨今話題となっている小学校教員への外国語 Teacher training が不可欠である。小学校教員への研修体制が県や行政で確立されれば今後の外国語習得の観念も変わってくると推測する。さらに、小学校教員も何をどのようにして指導していけばよいか徐々に明確になり、カリキュラムも組みやすくなると予想する。

3 提案

・提案その1 「無理のない早期教育を」

今後、無理のない外国語学習をするために、小学校一年生から「1日1単語」に親しみ、興味関心を引き出しながら語彙を増やすことが理想である。朝の会で「今日の外国語」などという項目を取り入れ、外国語への関心と語彙の増加を徐々に実現させる。モジュール時間を使用してアルファベットを書いてみる。英語の歌を一曲歌うなど英語に触れる時間を増やすことが実現できたらと願う。幼少のうちに習得した語彙力は大人になっても衰えない。習得した語彙や表現を大人になったら使えるという意識ではなく、幼少時代から知っているという意識をもつことが表現するための自信にもつながるのではない。児童と接していると、リスニング能力を優れ持つ時期は小学生であると実感する。民間の英会話教室では小1から小6まで2400語の単語を習得するところもあるが、(公立中学校は3年間で1200語)実際に子ども達はそれらの単語を抵抗なく習得することができている。歌や踊りをあつという間に習得する能力と同様に、言語習得をスポンジのように吸収するこの時期だからこそ、外国語と異文化に興味をそそる時間を毎日1分でも設けることはできないだろうか。2020年から小学校で英語が教科化される可能性もあるが、一斉スタートまで待つ時間がもったいないほど、小学生時代がチャンスなのである。

・提案その2 「他教科との連携」

前任校中仙中学校では、音楽の授業を ALT と連携して行う研究授業が行われた。生徒が「ふるさと」の歌曲を ALT に紹介し、ALT (ジャマイカ出身) が「ふるさと」をレゲエ風にアレンジしアカペラで歌うものであった。片言の単語、身振り手振りでコミュニケーションを積極的に図り ALT と曲を完成させる生徒の姿があった。互いに理解が図れずもどかしい表情をする場面もあったが、英語以外の授業で外国文化に触れたりコミュニケーション方法を模索することは大変充実した体験学習となった。実社会でも他と協力して作品や仕事を模索し成し遂げるといった場面があるが、中学生時代からその

ような体験が繰り返されれば異文化を受け入れようとする心が自然に育つ。美術、体育、技術家庭、理科など ALT が得意とする分野に触れることも言語を体験的に学ぶ一つの手段である。



4 おわりに

ネットワークが急速に開通する社会で生きるため、他言語を使えることや異文化に順応する能力を持ち合わせていることはもはや特別なことではない。むしろ幼少期から自然に身につけていくべき能力である。言語習得においては小学校低学年から「一日一英単語」に親しみ興味を耕すことでコミュニケーションの幅を広げる。小学校までに知り得た語彙の土台は、中学校でさらに力を発揮させる。全国一斉スタートを待たずに他言語を話す子ども達を今日から育てたいと願いながら小学校外国語活動に携わる日々である。